
アウラは呼ぶ

yoshina

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アウラは呼ぶ

【Nコード】

N8911B

【作者名】

yoshina

【あらすじ】

日常で気付いたことを思いのまま書き綴った詩篇。アウラとはオリジナルがもつ「崇高な」「一回きりの」「あるいは「不気味な」もの」を意味します。

靴底の花びら

ただいま

奥の居間から飛んで来る、おかえりを背で受け止め
淡いピンクのミュールから足を解放する

まずは右足

次に左

そして私は見つける

ぺろりと靴底からはみ出た何かを

ミュールを裏返し、その正体を認める

ひとつ、

ふたつ、

みっつ、

よっつ。

桜の花弁はぺったりと
その存在を張り付かせ
ここにいるよと私に言う

わかってます

心の中でそう眩き

私はそれを棚に仕舞う

次はどんな季節を踏みしめるのだろうか

そんなことを巡らせながら柵の扉をぱたんと閉める

玄關に、はがれ落ちた一片がそこにもやはり張り付いている

深夜にて

『あな』

ベッド側の窓からは
ぽかんと開いた穴が見え

黒い空にそれが目立つ

月だと言えばそれまでだが
空に黄色い穴が空いてるのだと
そう言っても間違っではないはず

仰向けになつた自分の目が
その穴を見つめ

向かつて手を伸ばしながら
5本の指をばらばらと
動かす

もちろん穴はびくともせず
ただじつと浮かんでいる

カーテンを閉めないまま
私は伸ばした手をまた下ろし
もぞもぞと毛布の中に
仕舞っていく

中で起立をするような
腕と腕を胴体につけ
顔だけを窓辺に向け続ける

白は無い

あるのは黒

そして穴

吸い込むことも
吐き出すこともしない穴は
ただじつと

私の上で開いているのだ

『夢をさまよう』

夢は見るのではなく考えるものだと
言っていたのはある学者だったか

夢というものは意識があるから考えられるのであって
本当に眠ってたら、意識が無かったら、
それは現われないそうだ

じゃあ今私が起きて考えていることと
目をつぶって考える夢は
どう違うのだろうか

同じように頭を動かす
同じように空想し
同じようにそれを認識する

違うのは目をつぶっているかどうかだけ

でも人は
真つ暗な世界で思い描くそれを

やはり夢と現実

今私がいるのは
夢なのか
現なのか

映画館のギモン

『特大オレンジジュース』

映画を見るときは

5分前までにトイレに行くのが
いいけれど

そのまま売店へ足を進め

ジュースを一本買ってしまふ

しかもSサイズが通常のMサイズみたいな大ききさで
売店のお姉さんにはにこやかにそれを私に渡す

果たして映画館の人は

私達に映画をちゃんと見て欲しいのか否か

そんなことを思いながらシートへ戻る

トイレに行かないようちびちびと飲み

何となくストローをがしがしと噛む

それでもいつの間にか特大オレンジは胃の中へ

残り時間は約1時間

さあ映画よ

そんな危機を忘れ去るようなクライマックスを

私の前に披露しておくれ！

『イクサ センソウ
戦と戦争』

戦じゃと出陣して死にゆく侍と
戦争だと突撃して死にゆく兵士

何となく見ていられないのは後者のほうで
何となく見届けようとするのは前者のほうで
スクリーンに広がる血は同じだというのに

それでも戦争は痛々しく
それでも戦は勇ましく

覚悟の叫び声が館内に響き渡る

お上に仕える兵士
お殿に仕える侍

どこが違うのだろうか

やっぱりちゃんとした違いがあるのだろうかけど
スクリーンで死ぬ彼らからはそれがわからない

下々に生きる者達からすれば
仕える対象が違うだけ

やることは同じなんじゃないだろうか

なのになぜ撃たれるほうが哀しいのか
なぜ斬られるほうが感じないのか

ああ、それでも

何で死んじやったのかなと
スタツフロールが流れる中

考えることは同じなんだよ

上を見上げて

『マイルーム』

青白く光る画面から目を離し
少し顔をしかめながら息を吐く

ぱちぱちと目を瞬かせ
そのまま開かず閉じてしまう

3時間くらいキー打ってたもんなあと思いながら
ゆっくり顔を上に向け
次の瞬間視界を戻す

そこに広がるのは見慣れた天井

ぱつと見は
ただの白

でもよく見ると
それは少し違うとわかる

真っ白ではない
少しクリームがかった白
そして無数のひし形に彫られたデザイン

見れば見るほどそれは天井で
しかしそれは初対面のようにもあり

私をずっと見下ろす天井はこんな姿だったのかと
今更ながら思ったのだ

『動けども動けども』

レンタルショップからの帰り道
ぶらぶら歩き流行の音楽プレイヤーをがんがん鳴らす

最近音量上がったかなと思いつつも
下げるボタンを押すことも無く
某女性シンガーの曲をエンドレスリピート

つと、おなかの空き具合を感じ
赤紫の空を見上げる

もう夕方か

そんな当たり前の自然現象を認めながら歩いていく

私は動くが空は動かない

家へ近づけども近づけども空は変わらない

意味無いことだと思い直し

目線を前に戻して歩いていく

暫くして家に着いた

玄関の門を開ける

そして思い出したようにまた空を見上げた

やはり、変わってない

当然のことを当然のように思うのが癪で

私は何故かイヤホンを外した

何も変わらないことは、わかっていたけれど

命短し悩めよ女

『他人事？』

いくらでも悩んだっていい

一番ダメなのは、何も考えないこと

そう書いたのは誰だったかなと

苦笑しながら己の文章を見直す

それはまあ、自分なわけで

自分で書いておきながら

実行できているだろうかと自問する

いわゆる「耳が痛い」の部類に入るような

そんな生活を送っている自覚はある

考えることを放棄した

無気力なモノがそこにいる

なんであんなことを書いたんだろう

自分に対する戒め？希望？

それとも教訓？

まだ間に合うだろうか、私は

悩んで悩んで悩みに悩んで

そこから一步踏み出しても

そのとき広がる世界は

私を受け入れてくれるだろうか

ねえ？

『お人形』

糸の切れた操り人形は

へたりと座り込んでしまう

ずっとずっと糸で引つ張られてきたお人形

考えることを放棄したお人形

立てなくなつたお人形

どうやって立つたらいいのかな？
どうやって歩いたらいいのかな？

どうしよう

どうしよう

自由を手に入れたソレは
代わりに力を失った

今までずっと糸で引つ張つてこられたのだから
切れた瞬間無力になるのは当たり前
ぼんやりと座り込んだまま
真つ暗な舞台にいる感じ

さて、どうしようか

とりあえず出来る事をしなくては

でも何が出来たっけ？

少しだけ考えた後

一つだけ出来そうなことがあった

目くらいは、開けることできるかも

頭痛

『氷の悲鳴』

ぱし

ぱし

麦茶を入れると音を立てる氷
凍える結晶が
悲鳴をあげる瞬間

ぱし

ぱし

潤う氷から生まれる
乾いた音

ぱし

ぱし

それはまるで
目で見ると全てを飲み込む頭が
サイレンを鳴らす瞬間

ぱし

ぱし

このままいつそ
全て砕いたほうが

ぱし

ぱし

悲鳴は聞こえないかもしれない

ぱし

ぱし

『揺れる』

ああまた来た

そんなうすぼんやりとした
自覚とともに押し寄せる頭の中の波

ざばあんざばあん
ぐらんぐらん

まるで嵐の中の船のよう

とにかく痛い
難破船が頭の中で揺れている

案外それは
立ち止まった時のほうが激しくて
動いてる時のほうが自分ごと揺れて
さほど自覚しなかったりする

だからこそ

全てが終わり佇んだ時に

ああ居たんだねと

その痛みを思い出す

カーテンを締め切り、光を追い出し

横になってじっと目をつぶる

揺れる揺れる難破船

真っ暗な視界の中で

船は倒れそうで倒れない

横転して沈んだほうが揺れないのに

どんだけ船ボロいのさ

とか

いつまで彷徨ってるのさ

とか

薬で眠りが来るまで考える

でも

正直言つとね

ホントに痛いけど
ホントに揺れるけど

この揺れる船がとても安心するのよ

朝日を浴びてゆったりと
航海する船はとても恐ろしい

とてもとても恐ろしい

嵐の中

ざばあんざばあん
ぐらんぐらん

ぼろぼろの船で真っ暗な空の下
彷徨い流れ行くほうが

ほっとする

この痛みは
私の痛みなのだ
私なのだ

この船が来なかつたら
どんなに恐ろしいことが

聞け

『叫び』

じわりじわりと肌を塗る暑さ
ひやあつと肌を叩く寒さ

その転換期が 今ここに ある

なんだろう

この時期になると心が落ち着かない
大人しく座ってられない

だけど嫌いじゃない

更に雨でも降れば最高だ

己を困う何かが
四季の移り変わりと
時を同じくして
変わりつつあるのだ

まさしくそれは
蛇の脱皮のような

だから
今の私を覆うそれは
とても薄い

とても
とても

こんな時

大声で天に叫んでみたら

どんな気分になるだろう

血が出るほどに

喉から潤いが消えるまで

叫び続けたら

きつと、気持ちは良い

自分の中が空っぽになるような
気持ちよさ

ああ なんて爽快！

だけど

叫び終わった時

それでもまだ気持ちは

良いだろうか

全てを出し尽くした体にあるのは

虚無感

叫んだ自分の周りは
何かも無いかもしれないね

それでも

四季は私を襲うのよ

『ざわめき』

台風が去った次の日の夜
ひんやり涼しげな真夜中
窓から見える黒の外の黒い並木

さわりさわり
ざわりざわり

静かに、でも確かに流れる冷たい夜風
こんな日は
とても胸がざわめく

さわりさわり
ざわりざわり

いつも見ているはずの木が
見知らぬお化けになったかのように

側で葉を揺らし幹をしならせた

お化けが言う

聞こえるかい、と

ミッドナイトミッドドローム

『深夜ですよ』

二十四時。

まだまだ。

二十五時。

まだ。

二十六時。

あと、もうちょっと。

二十六時半。

……そろそろかな。

きつと早く寝ても

ベッドの中で

居心地の悪さを覚えるだろう

まだ私はここに横たわるべきではない、と

まだ眠ってはいけない、と

誰かが言う

自分が言う

甘えて言う

結構重症だと思いつつも

まだ私は

起きていなくては

いけないらしい

『まぶたを閉じてても目は動く』

ベッドに入って

目をつぶる

この瞬間がとても好きだ

いや、安心できると言つべきか

もう何もしなくて良い
意識を手放すだけで良い
そう思える瞬間

横になる

眠りに陥る

光を閉ざす

夢の住人になる

まぶたを閉じる

色んな言い方があるけれど
とにかく何もしなくて良いのだ

ベッドに入って目をつぶれば

誰でも眠れば良いのだ

それを非難する者などいない
いたとしても

それは眠る自分には関係の無いこと

まぶたを閉じる至福の一瞬

一日の中で最も安心するそれは
その日の一番最後にやってくる

ああ、いらつしやい

今日もよろしくね

お手柔らかに頼むわ

その時は、誰でも一人
たった一人で一瞬を迎える

でも、時々気になることがある

その時はとても幸せで

何もしなくて良いのだけれども

それを迎える私が

手ぶらでいいものだろうか？

引越し

『案外部屋は寒かった』

初めての一人暮らし
思ったより部屋は寒くて

でもそれは気温のせいじゃなくて
一人しかいないから、部屋も暖まらない

カーテンと床の隙間にクッションをあてて
上着を着込んでラーメン食べた

テレビは電波が悪いらしく
残像がありありと映った

収納ケースが足りなくて
紙袋にストッキングと下着を入れた

近所にBOOKOFFが無くて
ちよつと困った

近所にTUTAYSが無くて
結構困った

意外と高い天井に
意外と広い1DK
真っ白な壁が

築二年を証明する

明日は自転車を買いに行こう
もう少し、外を見てみよう

『厳選本棚』

引越して持っていけない大量の本を売った

冊数三桁越して我ながらびびった

ついでに売れた金額も同じ三桁で少しむなしくなった

まあ、古本なんてそんなもの

うん、そんなもの

そう思わないとやってられねえ

引越した先の部屋に入れる小さな本棚

そこに収められる権利を得たのは

長編漫画と歴史小説

意外と最近の本を持っていかなくなったのが不思議だ
選んでいた大半の本は古かった

一番古いので10年も前からある漫画

これがマイバイブルというやつか

茶色く変色した歴史小説を手にとって見る

これはこれで、中々味があるような気がした

友達に貸して返ってきたら

表紙が破れていたのを思い出す

そういえば、あの時言いたいことを我慢した覚えがある

あれくらいの時期から我慢ということを学び始めたのかもしれない

一冊一冊にそれぞれの記憶がある

売った本も

残した本も

全てにありがとうと言って

これからも私は読み続ける

そして書き続ける

エコなエコ

「夏の風呂」

目の前の、何でも調べられる素敵な箱を眺めつつ
じんわり背中に湿ったものを感じる
京都の夜は湿っぽい

今日はどうしようかな
どうしようかな

お風呂に入るべきか
シャワーだけにすべきか

迷いながら時計を見る
午前二時

……シャワーにするか

水の節約にもなるしね
エコだしね

うん
うん

まあ、どこかが間違ったエコである自覚はあるけれど

エコってなんだか水戸黄門の印籠みたい？

「温い風」

最近寝るときに葛藤する
クーラーのオンorオフ

この時期が一番微妙に熱くて相当寝苦しい夜
でも

今から冷房つけたら真夏どうすんだよとか
体冷えるよとか
扇風機もあるじゃないとか
電気代もつたいないじゃないとか

とりあえず

一番最後の電気代が一番の悩みの原因なわけで

(結局金か！)

悶々と考えながら結局は扇風機のボタンを押す

これはエコだ

私が我慢した分が

地球温暖化防止に一ミクロン以下であろうとも
貢献しているのよと

ついでに体も冷えないし

一石二鳥よと

言い聞かせながら枕に顔を沈める

うーん、エコって大変

結局、次の日の朝汗べつとりで起床して

もう一回シャワーを浴びてしまうわけだけど

その時に使う水やガスと我慢した冷房は

どっちのほうが地球に影響するのかわかっているかについては
考えないことにしておく

「エゴ」

もし、いつか地球の水が全部溶けて
一面海になって
運よく人間が宇宙に引越していたら

『家から壮大で美しい地球海を眺められる！！
貴方だけの水族館
を堪能しましょう』

みたいな

ものすごく遠くまで見える望遠鏡が
人間の間に回ったりするのかしら

深遠の幸福

「one」

目を閉じても一人
目を開けても一人

ヒトは一人で成り立っている
ヒトは二人もいない
ザ・ヒューマン
でも、ヒトは一人では生きていけない

ヒトが集まって呼吸をする

目を閉じても一人
目を開けても一人

「あな」

人は穴を持っている
いつでも出入りできる穴を

その人次第で

それは

アリ地獄にもなり

歩行者天国にもなる

どっちが居心地いかと聞かれたら

案外アリ地獄も気持ちいい

歩行者天国で立ちすくむ自分は

きつと不安だろうから

でもね

居心地いいだけで

幸せにはなれないのよ

「リトルリトルミー」

小さな私が見ている

小さな私の目は

とても暗く

にごっつていて

とんがっつていて

ふと思う

あの時

ああならなかったら

今どうなっていたらろう

文章も書いていないかもね

その代わりの幸せを

見つけているのかもしれないけれど

その代わりの幸せってなんだろう

それは今の私でも幸せ？

ていうか

「幸せ」って

そう自分が思えば

その時から

幸せなのだけど

「ミミ進化論」

引き止めるのは自分

あきらめるのは自分

逃げるのは自分

走るのも自分

眠るのも自分

自分は

自分で動く

ゼンマイは

自分で動かせ

飛び立つのなら

一歩下がって

助走をつけて

地面を蹴り上げ

空を見る！

とある根の話

花を抜く。

茎を抜く。

根っこを抜く。

根についた土を見る。

根があつた地面を見る。

そつと根を元に戻してみる。

でも戻らない。

根は頼りなく傾くだけである。

おかしいな。

同じところに同じものを戻すだけなのに。

試しに、何度か下に押し付けた。

でも根っこは、どんどんしな垂れていくだけだった。

なるほど。

根っこだけでは立たないのか。

じゃあ、それを支える土はどこにあるだろう。

辺りを見渡してみたが、見つからない。

(意外と足元に落ちたりするけれど)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8911b/>

アウラは呼ぶ

2010年10月12日19時36分発行